



二 みち恋（金星）

今日もシャトルは満員だ。プラットホームには、次々と人が集まってくる。啓介はため息とともに、ふっと顔を上げる。

啓介は高校生。金星から地球の高校に通っている。金星にも宇宙人が通う高校はあるのだけれど、両親の断つての願いで、高校からは地球人だけが通う学校に変更した。

もちろん、中学校までは、金星にある地元の学校に通っていた。そこは、地球人だけでなく、地球上のタコに似たタコ星人や虫に似たキリギリス星人、魚の顔の半魚星人、反対に、顔は人類と似ているけれど、下半身が魚の人魚星人、毎年、十二月からは、親の手伝いで一か月間は休学するサンタクロース星人などが通っていた。

人種が異なるため、共通言語は、宇宙語だ。小学校からだと九年間は通っていることになる。宇宙語はペラペラだし、地球人以外の宇宙人たちとも友人になった。このまま、高校も同じように宇宙人たちのいる高校に行くつもりだったが、成人になっても、地球語や地球文化を知らないまま育つのはいかなものか、地球人としてのアイデンティティがなくなるのではないかと不安かつ心配になった両親が、啓介の承諾も得ずに、地球の高校に申し込んだのだった。

それ以来、啓介は地球の高校に通っている。地球の高校といっても、もちろん、日本人だけではなく、アメリカ人や中国人、ヨーロッパ人など、宇宙人と比較すると、皮膚の色や手足の長さ、目や鼻の形など、取るに足りないような差異しかない人種のるつぼの学校である。

啓介としては、見た目としてはそんなに差異のない地球人（人類の中では、それはサルと神ほどの大きな違いだと、声高々に主張しているグループもあるが）と付き合うよりも、手足の数や体形など、明らかに差異のある他の宇宙人たちと交流する方が楽しかった。

だが、同級生たちの中には、バツタ星人や怪獣星人たちは自分たちとは異なり、やはり同じ地球人と一緒にいる方が好ましいし、地球人の方が他の星人よりも優れていると本気で考えている人も多かった。その差異と何なのか。優れているとはどういうことなのか。啓介がずっと考えてきた疑問であった。

そんな啓介が恋をした。相手はピーターパンに出てくるように背中に羽が生えていた。また、身長は人差し指程度しかなく、体形は地球人とよく似ていた。彼女やその友達たちは水星に住んでいた。彼女たちは妖精専用の小さなシャトルに乗り込み、月に向かう。月に到着すると、途中下車し、金星から地球に行く大きなシャトルに乗り換えた。月は他の星から地球に向かうシャトル

のターミナル駅となっていた。

最初、啓介は妖精のことは、妖精がいるなあ、とぐらいにしか思っておらず、他の星人と同様に特別に意識してはいなかった。ある日、いつものようにシャトルは満員だった。その満員の中、妖精が何かから逃げるようにして啓介の胸の前に飛んできた。啓介は彼女に気がつく。彼女は顔を伏せたままで、時折、体を震わせている。どう見ても様子が変わる。

啓介は彼女の様子を伺う。すると、彼女が小さな手で振り払っているにも関わらず、彼女の体を触手が撫でていた。痴漢だ。その触手の先を目で追う。自分から二、三人離れたところにクラゲ星人が立っていた。ただし、顔はこちらを向いていない。触手だけが伸びているのだ。

犯人はこいつだ。そう確信した啓介は、その触手に、朝、シャトルに乗る前に駅で買ったチキンナゲットのマスタードをなすりつけた。クラゲ星人は、何を勘違いしたのか、そのマスタードを妖精から出た体液だと思い、シュルシュルと触手を戻すと、口の方に戻した。

その瞬間、クラゲ星人の体に電気が走ったかのように、震えが起こった。啓介にはクラゲ星人の顔がどこにあるのかわからなかったが、明らかに怒りを体全体で表していた。その姿に対してマスタードを大きく掲げ、睨み返す啓介。沈黙の時間が続く。だが、それ以降、クラゲの触手は彼女の体に忍び寄ってくることはなかった。

「ありがとうございました」

妖精が顔を赤らめながら、啓介の耳下で囁く。周りの乗客には羽音としか聞こえない。

「いいえ。当たり前のことをしてだけですよ」

啓介は当然のような顔で答えるものの、彼女が顔を上げた瞬間、マスタードを口全体にほうばった時以上の電撃が走った。そう恋の雷が落ちたのである。

それ以来、啓介と妖精は同じ時間帯のシャトルの同じ車両の同じ場所に乗り合わせた。彼女は、普段は、啓介の顔の前で羽ばたき、会話を楽しむとともに、満員となり、体が押しつぶされそうになれば、啓介の胸ポケットに隠れた。

妖精との会話は楽しかった。同級生である人類たちとは違う考え方で、異なる発想があった。彼女も啓介との会話を楽しんでくれた。自分たちと異なる考え方と違う発想に驚いた。彼女も高校生だった。彼女も妖精ばかりの地球の高校に通っていた。その場所は啓介も知っている公園だった。

「そんなところに妖精たちの高校があるなんて知らなかったよ」

胸ポケットの中の彼女に話し掛ける。

「そうよ。あたしたちは地球人たちが普段生活しているところにいるのよ。でも、地球人は誰も気づかないし、気づこうとしないの。多分、自分たちのことにしか関心がなく、他の異星人や生物には興味がないのでしょう。もし、関心を持つとしても、それは食や愛玩の対象で、存在そのものとしては認めていないの。弄んでいるだけなの。強者の論理ね」

そう話す彼女を見るのを啓介は辛かった。

「そんなことないよ。僕は違うよ」

啓介は右手で胸ポケットをやさしく包む。自分のものなのか、妖精のものなのか、いや、両方の、温もりが感じられた。温もりこそが生の証だった。

「ありがとう。でも、妖精たちは地球人を、正確に言えば、大人を信用していないわ」

「じゃあ、僕は大人にならない」

啓介は彼女が見つめている窓の外の同じ方向を見つめる。

「でも、なるわ」

彼女は顔を上げずに、窓の外をずっと見つめている。青い地球が近づいてくる。恥ずかしそうに白い雲が地球を覆っている。二人は、同じ方向を向いていながら、違うものを見ているのではないか。啓介はふと不安になる。だけど、それを声に出して言うことは憚れた。口に出せば、全てが終わってしまうのではないかと思えた。それは、啓介が大人になるということかもしれない。

「今日、月で途中下車しない？」

今までは、登下校中のシャトルの中だけの付き合いだったが、思い切って、デートに誘ってみた。シャトルの中での会話も楽しかったが、やはり周りには乗客がいる。大声では話せないし、他人の目が、耳が気になる。物理的に二人になりたかった。

「ええ、いいわよ。今日は塾がないから」

こうして二人は、学校の授業が終わると、シャトルの駅で待ち合わせ、同じ便に乗った。

「あぶなかったわ。もう少しで遅れそうだったの。だって風が強いんだもの」

羽音のような息をはずませながら、妖精は啓介の胸ポケットに飛び込んだ。季節は冬。折からの寒さと強風で妖精の体は冷え切っていた。その感触が啓介の肌にも感じられた。そんな妖精を愛おしむように右手でポケットを覆う。

「体が温まってきたわ」

上目遣いでポケット中から啓介の顔を見つめる。その顔を見ているだけで、啓介の心と体は温まってくる。

「着いたよ」

月だ。地球から金星までの間に、月の駅があった。そこから、妖精は別のシャトルに乗り換えて妖精の住む彗星に帰るのであった。二人は月の駅に途中下車して、構内から外に出た。だが、誰も構外には出ようとしな。反対に、構外から人が乗ってきていた。月で働く人たちが、地球や金星など住んでいる星に帰るためだ。

昔、月は、地球人が初めて、太陽系の惑星に降り立った場所として、観光客等は月のあちこちを訪れた。だが、人はすぐに月に飽きた。新たな刺激を求めて、他の星を訪れるようになった。そのため、今は寂れた観光地になってしまっていた。いや、元に戻ったといった方がいいのかもしれない。それこそ、月は地球人に弄ばれただけなのだ。

岩や土しかなかった地に、ホテルや飲食店等が建ち、一時は観光客等で賑わった。そのおかげで、今も、駅の周辺は、地球から近いということで、第二の入植地として、ビルやマンションが立ち並び、ビジネス都市に変貌した。

だが、そこから離れた、かつての観光地であった月の裏側ではホテル等は取り壊されもせず、廃墟となったまま残っている。行政から所有者に対し、危険だから取り壊すように命令が出ても、所有者は「廃墟じゃない。使用していないだけだ。その建物は財産だ」と主張し、いたずらに問題を先送りしていた。行政も私有財産のため、所有者の強弁になすすべはなかった。

二人は駅の近くの繁華街とは反対の、今は廃墟となったホテルなどのある月の裏側に回った。そこは太陽の光が当たらない暗闇の地であった。だが、その暗さが、かえって、星の瞬きを際立た

せた。宇宙全体の星がはっきりと見える場所であった。明かりを失うことで、明かりを得る。賑わいを失うことで、静寂を得る。何かを失うことで何かを得ることができるのだ。だが、今の二人にとっては、何かを得ることであっても、何かを失うことなんて信じられなかった。

「きれいだね」

啓介は妖精の横顔を意識しながら、漆黒の中の瞬く黄色い光たちを指さした。

「でも、暗くて恐いわ。そして、冷たいわ」

妖精は宇宙の暗闇と冷え切った外気から顔を背けると、啓介の胸に顔を伏せる。彼女の額と鼻と唇のぬくもりが池に投げられた石のように啓介の胸から体全体に波紋のように広がっていく。

気温が低ければ低いほど、妖精のぬくもりがまるで裏側にあるはずの太陽が月の中心部を突き抜けて啓介の体を燃やすように熱く感じる。二人はひとつだ。これほど妖精と一体感を感じたことはこれまでになかった。そして、ひとつは二人だ。

永遠は一瞬で、一瞬は永遠だった。時間にすればわずか一時間ほどであったが、啓介と妖精は未来という、らせんのDNAが一本となり、永遠につながっていくように感じた。

その日以来、時間の都合をつけては、二人は月で途中下車した。そのたびごとに、月の表面に、二人の足跡が増えていった。もう、人類の最初の一步なんて、どこに行ったのかわからなくなっていた。

だが、そんな幸せ絶頂の二人にも切り裂かれたような絶望が訪れた。啓介の両親から妖精とは付き合うのをやめなさい、また、妖精の両親からも人間とは付き合うのをやめなさい、と叱られたのだった。それでも、二人は会うことをやめなかった。

すると、啓介の両親は地球の学校から金星の学校へと啓介を転校させた。また、妖精の両親も妖精を地球の学校から別の星へ転校させた。二人の接点はなくなった。もう会うこともないし、会うこともできなくなった。だが、それでも、二人は、親の目を盗んでは、地球行きのシャトルに乗り込むと、月で途中下車した。久しぶりに互いに顔を見合わせる二人。感極まったのか、言葉が出ない。だが、顔を見つめあうだけで心が満たされる二人だった。

妖精は啓介と一生いられるように必死に考えた。だけどいい考えは思い浮かばない。頭が爆発しそうになるくらい考えた。ある日、頭が熱に浮かされ、夢遊病者のように街を放浪していると、街角の占い師に呼びかけられた。

男のような黒い顔がマグマのように吹き上がってきた。

「お嬢さん。何をそんなに」

そして、その男の顔を遮るように女の赤い顔が炎のように浮かび上がってきた。

「悲しい顔をしているんだい」

再び、男の顔が女のような顔から浮かび上がってきて

「私に」

そして、その男の顔を再び覆い隠すように女の顔が

「話してごらんよ」と囁いた。

その占い師は男なのか、女なのか、妖精にはわからなかった。声のトーンは、顔に合わせて低い声から高い声に変わった。まるで、ひとつの顔に二人の人格が住み着いているようだった。また、姿かたちは、人類のようでもあり、どこかの星のようでもあった。

普段ならば、占い師なんかには目にもくれず、存在さえも無視していた妖精だが、このまま啓介のことを思い続けていると頭だけでなく体も爆発しそうだった。何かに頼りたかった。何かにすがりたかった。また、その占い師には妖精を有無も言わさず引き付ける力があつた。こうして、妖精は占い師の前に進み出た。そして、啓介への気持ちをダムのできかたが壊れたか水のように激しい勢いで占い師に叩きつけた。

「そうかい」

「そうかい」

占い師はその激しい言葉を、男と女の両方の顔で柔らかく毛布のように受け止め、同じ言葉を別の声で頷いた。妖精は啓介のことを占い師に吐露したおかげで、少しは気が収まった。そのまま、占い師の下を立ち去ろうとした。すると

「お嬢さん」

「一体、どこへ行くんだい」

占い師からの思わず振り向かざるを得ないような言葉が掛かった。

「ありがとうございました。おかげで、少しは気が晴れました」

だがその言葉と裏腹に、妖精の顔は悲しいままだった。気分が晴れたところで、啓介との関係が改善するとは思えなかったからだ。

「ここに」

「触れてごらん」

占い師が右手を差し出す。そこには人差し指だけが伸びていた。

「どういうことですか」

妖精は馬鹿にされたのかと思い、口をむの字にする。

「お前の願いが」

「かなう方法だよ」

占い師が男と女の顔でほほ笑む。妖精は疑うものの、最後の賭けにすぎると目、恐る恐る人差し指を伸ばす。占い師と妖精の指が触れた。その瞬間、妖精の体に電撃が走る。目を見開いたまま身動き一つできない妖精。

「何か」

「見えたかい」

占い師の言葉に、妖精は言葉を発することなく、大きく頷いた。

「それじゃあ」

「やっごらん」

占い師は強制するのではなく、あくまでも妖精を見守るようなやさしい言葉だった。

「はい。わかりました」

妖精の目は綺羅星のごとく輝いていた。未来は希望の中にあることを示していた。

啓介は妖精と一生いられるように金星で必死に考えた。だけどいい考えは思い浮かばない。頭が爆発しそうになるくらい考えた。ある日、頭が熱に浮かされ、夢遊病者のように街を放浪していると、街角の占い師に呼びかけられた。

女の赤い顔が炎のように大きくなった。

「少年よ。何をそんなに」

そして、その女の顔からマグマのように男の黒い顔が浮かび上がってきた。

「悲しい顔をしているのか」

再び、男の顔から女の顔が覆いかぶさってきて

「あたしに」

そして、その女の顔を突き破るかのように男の顔が

「話してごらん」と囁いた。

その占い師は女なのか、男なのか、わからなかった。声のトーンは、顔に合わせて高い声から低い声に途中で変わった、まるで、ひとつの顔に二人の人格が住み着いているようだった。また、姿かたちは、人類のようでもあり、星のようでもあった。

普段ならば、占い師なんかには目にもくれず、存在さえも無視していた啓介だが、このまま妖精のことを思い続けていると頭だけでなく体も爆発しそうだった。何かに頼りたかった。何かにすがりたかった。また、その占い師には啓介を有無も言わず引き付ける力があつた。こうして、啓介は占い師の前に進み出た。そして、啓介は占い師に妖精への思いを荒れ狂う海が船を飲み込むかのように激しい勢いで叩きつけた。

「そうかい」

「そうかい」

占い師はその激しい言葉を、女と男の両方の顔で柔らかく毛布のように受け止め、同じ言葉を別の声で頷いた。啓介は妖精のことを占い師に吐露したせいで、少しは気が収まった。そのまま、占い師の下を立ち去ろうとした。すると

「少年よ」

「一体、どこへ行くんだい」

占い師からの思わず振り向かざるを得ないような言葉が掛かった。

「ありがとうございました。おかげで、少しは気が晴れました」

だがその言葉と裏腹に、啓介の顔は悲しいままだった。気分が晴れたところで、妖精との関係が改善するとは思えなかったからだ。

「ここに」

「触れてごらん」

占い師が右手を差し出す。そこには人差し指だけが伸びていた。

「どういうことですか」

啓介は馬鹿にされたのかと思い、口をむの字にする。

「あなたの願いが」

「かなう方法だよ」

占い師が男と女の顔でほほ笑む。啓介は疑うものの、最後の賭けにすぎると目、恐る恐る人差し指を伸ばす。占い師と啓介の指が触れた。その瞬間、啓介の体に電撃が走る。目を見開いたまま身動き一つできない啓介。

「何か」

「見えたかい」

占い師の言葉に、啓介は言葉を発することなく、大きく頷いた。

「それじゃあ」

「やっごらん」

占い師は強制するのではなく、あくまでも啓介を見守るようなやさしい言葉だった。

「はい。わかりました」

啓介の目は雲一つない空のように澄み切っていた。未来は希望の中にあることを示していた。

二人は両親の目を盗んで、人目につかないように、いつもの出会いの場の月の裏側にやってきた。占い師に言われたことをどうしても確かめたかったからだ。

いつものように、妖精は啓介の胸ポケットの中から顔を出していた。二人は、これまで会えなかった時間を取り戻すかのように語り合った。しかし、お互いに占い師のことについては触れなかった。占い師との体験が思い浮かんできて、体中が熱くなったからだ。

会話が途切れた瞬間、啓介は胸ポケットの中の妖精に向かって人差し指を伸ばした。その様子を見た妖精は、一瞬、驚いたような顔をしたが、すぐさま頷くように、啓介に向かって人差し指を伸ばした。人差し指の距離が近づいてくる。五センチ、一センチ、そして、先端が触れ合った。

啓介の顔が上がる。体が震える。妖精の顔が時を止めたかのように強張る。二人の体に衝撃が走り、啓介はその場にしゃがみ込み、妖精は啓介の胸ポケットの中に崩れ落ちた。

そして、しばらくすると、妖精の体はずんずんと大きくなって、啓介のポケットからはみ出た。反対に、啓介の体はどんどん小さくなっていく。やがて、妖精は羽が落ち、地球人の体となり、啓介は羽が生え、妖精の体となった。互いに黙ったまま見つめあう二人。

人差し指が触れ合う効果は互いの予想通りだったものの、結果は思惑通りにはならなかった。指を触れ合う前に、お互いがどう思っているかを尋ねるべきだった。だが、啓介は「早く、妖精に」、妖精は「早く、人間に」なりたいという思いが強すぎて、相手が何を考えているのかまで、考えが及ばなかったのだ。

沈黙の中に、啓介の羽音だけが響く。啓介は慣れない羽をぎこちなく動かしながら、目的地が定まらないまま、ふらふらと漂いながらも、ようやく妖精の胸元に飛び込んだ。

「あたたかい」

「わたしもよ」

二人は太陽を見上げる。太陽は、時に赤い炎の表面に黒いマグマが噴出したり、また、黒いマグマで表面が覆われたかと思う間もなく、赤い炎に包まれた。その光で、二人の影は伸び、やがて一つになった。

人差し指の触れ合いの効果の結果はどうであれ、二人の思いは一つになった。こうして、啓介は妖精となり、妖精は地球人となった。この姿を見た啓介と妖精の両親は、あれほど嫌っていた妖精を、また、あれほど嫌っていた地球人を、互いに認めざるを得なかった。

二人は再び、地球の学校に通うことになった。そして、啓介は妖精の姿で人間の学校に、妖精は地球人の姿で妖精の学校に行った。学校では、校長を始め、教頭、教師たちは大慌てだったが、同級生たちは、そういうこともあるのかなあ、という反応だけで、これまで通りの彼や彼女と交流した。

今日も二人は、月で出会うと、一緒に地球へ向かった。地球へ向かう満員のシャトルでは、啓介が妖精の胸ポケットに入った。そんな時に、再び、シュルシュルと触手が伸びてきた。以前、妖精を襲ったクラゲ星人だ。その触手が妖精の胸元を狙う。

「許さない」

啓介は触手に飛びつく。だが、体が小さいため、触手に跳ね飛ばされ、妖精の胸元にぶつかった。その衝撃で、啓介の体は魔法が切れたかのようにずんずんと体が大きくなり、元の人間の姿に戻り、羽は背中の肩甲骨に吸い込まれるように消えた。反対に、妖精はどんどん小さくなり、元の妖精の姿に戻り、背中の肩甲骨から羽が生えた。

地球人の姿に戻った啓介は妖精を胸ポケットに隠すと、クラゲ星人の触手を強引に引っ張った。相手の予想もしなかった行動に、クラゲ星人の顔は啓介の顔のすぐ前にまで引き寄せられた。

「久しぶりだね」

口は笑みを浮かべるものの、眼光は鋭い啓介。

「へへへへ」

愛想笑いしかできないクラゲ星人。ちょうどその時、シャトルのドアが開いた。月に到着したのだった。プラットフォームでは、乗り換えするために多くのお客さんが列を連ねて並んでいた。啓介は触手を円盤状に回転させる。

「やめてくれ」

クラゲ星人は叫び声を最後まで上げることなく、シャトルのドアの外に放り出さ、啓介たちが逢引きを重ねていた月の裏側まで飛んで行った。

「今日は、このまま金星に行こう」

「ええ。いいわ」

啓介の提案に妖精は小さく頷いた。啓介は胸ポケットに手を当てる。このぬくもりだけで一生、生きていけると確信した。その啓介の満足そうな顔を彼女も同じ気持ちで上目遣いに見つめるのであった。